―越番の話―

語り　坂本七郎〔出島村田伏〕

田伏つうとこはな，石田，北前原，山田，沖之内，根本前原，横須賀，上根，後路，中台の九つの小字から成ってんだが，漁が特に盛んだったのはこのうち，石田，北前原，沖之内，後路だな。わしの家のある石田なんどでは帆曳をやった家が10軒以上もあるし，小漁の者も数えるつうとずいぶん多かったよ。わしが小さい頃は百姓と漁師合せて100戸ぐれえだったが，今は300戸越えてるだな。

わしは帆曳をやった。親父はあんましやんなかったが，先祖は漁をやってたんだ。代々。おじいさんつう人は延べ縄だな。うなぎ取り専業だ。それからそれ，於朶（おだ），鯉おだつうのを湖（かわ）ん中さいくつもいくつも組んで，そいつで鯉を取った。とりなわもやったな。こいつはカヤのような水草で縄を編んで，それにとりもちをくっつけて，夜，風上から流すんだ。

一キロも二キロも長い縄だよ。そうするつうと，水鳥がこの鳥縄にくっつかっちまあんだな。ああしたもんでずいぶん水鳥がとれたんだから，昔は水鳥がいっぱい居たんだよ。

わしの家の前は田んぼで，その先は砂地と葦原（やわら）だ。そしてそっちこっちには，漁師が船入れるエン間があった。湖の岸にゃえかい柳がずーと植わってたんだ。こいつは今はどこにも全然ねえがね，昔は湖岸どこの村でもずーと植えてあって大切にしてた。昔は水が出た時に流木だのいろんなものが流れて来て，田ん中さ入ってだめにしちまあんでそいつを妨ぐのに柳を植えといたっつう話だな。そんだから，まず，この前の水べりは柳の背の高いのがどこまでも並木んなって続いてたんだよ。

エン間はこの下にいくつもあった。わしの家の下にあったのは安右衛門のエン間だ。わしの家の屋号が安右衛門つう屋号だったからエン間にもそうした名前をつけたんだ。そりや他の家の船が入ったってかまあねえよ。そのうしろ（北の並び）に弥右衛門エン間があって，そん次が弥兵衛エン間，そん次が今は石田の船溜りがあんがね，昔はああしたもんではなくて，内の方さ15間ぐれえ堀り込んだえかいエン間があった。こいつは田村の人ら全体のエン間ってゆう具合だったな。ハサ（網を干す場所）をこさえて，船が何艘も入れるようになってたんだ。これより南にはあんましなかったが…そうだな，小左衛門エン間があったっぺか。

エン間つうやつは漁師が船入れんのにばかし使ったんではねえんだ。この周りにゃ田んぼがあんだろう。その田んぼに水入れんのに使ったんだよ。そんだから百姓らもこのエン間を使ってたわけだ。

昔は動力つったって人の力より他にゃねえから，足踏みの水車でやったんだよ。男が担いでいげるようになってる水車でな，そいつをエン間んとこさ持ってって，とんとんと踏んで，そんで湖（かわ）の水を田さ上げたんだ。

水車は個人で持ってたんだ。そんだから，足踏み水車ってのは水を自分の田さ上げる時

に，自分の家の水車をもってって，そんで足で踏んで上げたんだ。大正中半に焼玉エンジンの揚水機が観音様の下に出来たが，そんでもそれは全部の田んぼにゃ渡らなくて，この周りの田（かばぶきと呼ばれる一帯）さは水が来ねえんで，昭和もしばらくは足踏みでやってたな。足踏みの水車ではなくて，箱胴んなってるもので水を上げたこともあったな。

水路さこいつをとりつけて，手で中の板を押すと，上さ押すときは羽根みてえのが開いて水を上さ押し上げる。後ろさひく時にはちようつがいみてえになってる羽根がぺったら閉じる。そうた風になってる道具で，水を押し上げた。

田伏は出島の行きどまりだかんね。今だら自動車でぐるっと高浜回るつうこともそうたに苦ではねえが，昔は高浜回って玉造なんぞに行ったんでは日が暮れちまう。そんでここには渡し船があった。玉造の浜それから高須と田伏の間を往復したんだ。わしはこの渡船を長い間やった。20年ぐれえ帆曳をやってそれから越番になったんだ。越番つうのは，渡し船の船頭のことだよ。湖（かわ）を越していく船の番人つうんで越番てゆったんじゃあんめえか。わしが越番になったのは昭和18年だな。36ん時だ。若いもんはみんな戦争に行っちまって，漁をやるもんもいねえ，大変な時だった。越番つうのは，県の認可がいる。毎年，県さ申請して越番をやる認可をもらわなけりやなんねえ。申請が多い時は入れ札だよ。つまり，村内のもんで，幾人も船頭になりてえつう人がいるつうと，県から役人が来て，申請者に入れ札させて，その中で一番高い値段で渡船業を請負った者がその権利をもらったわけだ。たとえば弥兵衛が1年70円で権利買あべと思っても，吉エ門が100円の札入れれば吉エ門がその権利を取る。そんでその権利を買って，1年船頭やって，その渡し賃の合計が150円あれば，150－100で50円が吉エ門の儲けつうことになるわけだな。

船賃は大正時代には5銭とか10銭の時もあったが，昭和18年に一人35銭になって，そいつが昭和35年には一人100円まではね上った。

昔はみんな手漕ぎだよ。船もそうたにえかくねえから5.6人しきゃ乗れねえ。荷物は手荷物ぐれえのもんだな。風向きがいい時には，ちいちぇえ帆を上げて走った。まさかその方が楽だかんな。わしははじめは越番になる気はなかったんだが，戦争で若いもんが居なくなっちゃって，越番を勤めるもんもいねえ有様でな，こんでは困るつうんで村の主な人らがわしにやってくれねえかってたのみに来たんだ。渡船は何百年も続いてるんだし，村の人間にゃ一日も欠かせねえもんだから，なんとかやってくんめえかってゆうんだよ。そんでわしもひきうけたんだ。この時には機械船が走るようになってて，横浜の海運局に行ぐと，機械船の運転認可がもらえた。そんで横浜の海運局の本局まで，幾度も通ったよ。

田伏の船溜りの横に船番小屋があった。二間に三間ぐれえのもんで，その小屋の中で客が来んのを待ってんだ。一人でも客が来れば出る。待たせるなんてことはしねえよ。大昔から，越番は客が来ればすぐ出るってことに決ってたからな。何人来るまで待たせるなんてことはなかった。そうすっと船を出してあんまし行かねえ時に，別の客が陸から「オーイ，のせてくんねえかよー」なんて呼ばられることがある。そうすっと，船返して，その客を積んで，また行ったもんだ。客が来ねえ時は小屋ん中で草履編むとかなんとかして，客待ちしたんだ。

雨でも船は出したよ。蓑笠着てな。苫は切んないよ。（船に屋根はつけないという意味）

玉造の浜にも渡船はあった。そんで向うからも客乗せて来る。そんで途中でお互がでっ

かせた（出会った）時には，乗っけてる客を交換して，そっから返ってくることもある。

そうすりゃ途中で帰れんだから楽だかんね。客を湖さつぺらせる（落とす）なんてことは一度もなかったよ。風があっ時には波が高くて，向うの船さ乗り移んのも骨が折れたが，そんな時でも落っこちるなんてことは全然なかったっけね。

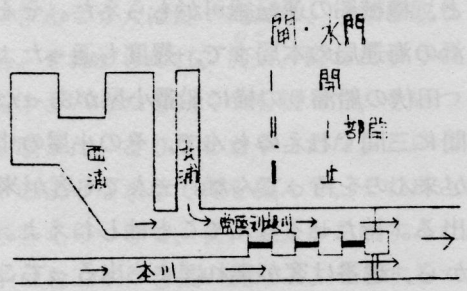
客が多い時には待たせなけりゃなんねえことがあった。風の強い日なんぞは危ねえから三人ぐれえしか運べねえ，そんで後から来た人らには待ってもらったが，一時間ぐれえは待ってもらあんだから，今の人にゃなかなか辛抱できめえね。

昔は帆曳船が何十つうほどこの前を通った。時には百越す時もあったから，渡船もぶっかりそうになることもあったっけよ。三俣沖の広いとこは船がちらばってっからいくら船が出てもいいんだが，この田伏の鼻先さ来っと急に狭くなっから，船が互に寄さって来る。南風が強い日なんぞには，船が混んで漁師らが船の上からどなり合って，えかい騒ぎになっことがあんだ。網の流れ具合（網のけつ）も風の強さでいろいろに変っかんね。その流れ具合を見て，網のけつをぶつけねえように下さ回って，そうやって漁師らのじゃましねえように，よけよけ船さ渡したもんだよ。

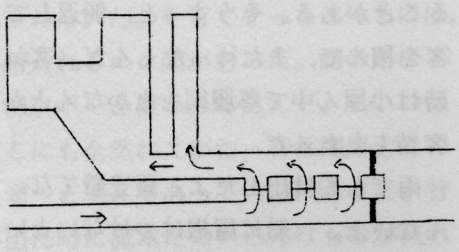
（文責　佐賀純一）

P 48　操作図

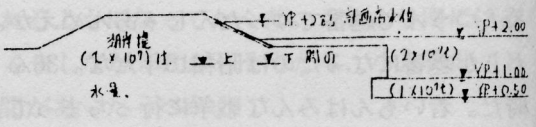
1



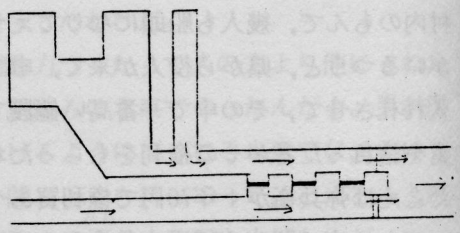
2



3



4



あやめ作り十年

保　立　俊　一

桜川の土手がゴミ捨て場になり，川のよごれが極度に進んだ昭和46年に，桜川の土手の桜を復旧させるべく植樹しようという問題と，土手に街路燈を立てて照明しようということが市の観光協会の中で話された。県土木事務所に相談に行ったら，土手に木を植えることは河川法でまかりならぬと一言のもとに不許可になった。照明の方も柱を立てることはいけないということで何回かの交渉の結果ダメだということになった。何とか川をきれいにしたい，土手を市民のいこいの場に出来ないものかと考えた末，河川敷にあやめでも植えたらどうだろう，ということになった。

あまり賛意も無いまま積極的な取組みは出来ないでいたのだが，菊田さんという篤志家からあやめ（花菖蒲）の苗の提供があった。

早速匂橋の下の河川敷にそれも完全に整地しないまま植えた。雑草を一寸のぞいただけのあまりよい土質で無い河川敷の一隅に植えられた苗は，こんな所でそだつのだろうかと思えたのだが，翌年どうにか芽を出して6月には小さいながら花が咲いた。これはどうにかなるなと思った。

観光協会の中の緑化推進部会という名まえだけは一人前だが何も出来なかった部会であやめ園（正確には花菖蒲園）を年次計画を立てて取組むことになった。管理には，桜川沿岸の町のこども会，老人会，土浦一中のＪＲＣ，其の他の団体に委嘱することにした。

市民の参加，それもこども達に参加してもらうことで，川を，又町を愛する心をそだてよう。という理想をもってこの事業の目的とした。大きな夢があったのである。匂橋から，銭亀橋近くの中州まで14区画のあやめ園とよぶにはあまりにお粗末なものであるけれどもとに角簡単な整地をした。苗の方も桜村であやめ栽培をしていた篤志家から無償で，それもかなりたくさんの苗をもらい受けた。

昭和48年３月，労力奉仕によって苗の植付けが行なわれた。６月，植えたばかりの苗は何とかそだって花を咲かせた。まさか今年は咲かないだろうと思っていたのに，数は少ないが花が咲いた。予算も無いまま，整地も園とは名ばかりまわりを縄で区切っただけのものであったが，こども達とお母さん，それに老人の手で草刈がすすめられて来た。雑草と競走しながらの園作りであったので花が咲いた時の感激もひとしおであった。10年たてば土浦の名所になるだろうと本気で思った。作業にも力が入った。日を定めて草刈りをする町内もあり河川敷のゴミは目に見えて無くなった。川も思いなしかきれいになって来た。49年，50年，あやめ園は益々きれいになり見事な花が咲きそろった。然し自然とはきびしいものである。雑草の強さをいたいほど感じたのはそれからである。暑い夏の日ざしの中での草刈り奉仕に，こども達もお母さんもつかれて来た。一週間もほうっておくとすぐ雑草に食われてしまう。何しろ皆しろうとばかりであったので植えかえもしないままのあやめは，のびなやみになった。それに拍車をかける事件がおこった。昭和54年11月県土木の工事で土手にコンクリートブロックを張り付ける工事がはじまった。あやめ園は大型の土

木機械にふみにじられた。あやめ園作りに長い間取組んで来た我々には何の連絡も無かった。市に苦情を言ったら，工事が終ったら元通りに直すということであった。然し工事が終ったあとに残ったのは，石ころとコンクリートのかけらでうずまった赤土の荒地であり，ただ園の周囲の柵だけは元の形に近いものが作られただけである。苗を植えたがすぐ枯れた。市で品種のよい苗も用意し，かなりの予算をかけて園芸家の田圃で一年そだて，植付けたがそれもすぐ枯れた。専門の園芸業者にたのんで園作りを進めたが苗は思うようにそだたなくなった。こども達も学校のＪＲＣの生徒も意欲を失った。それでも草刈りや石ひろいは曲りなりにもやっているのが現在だ。

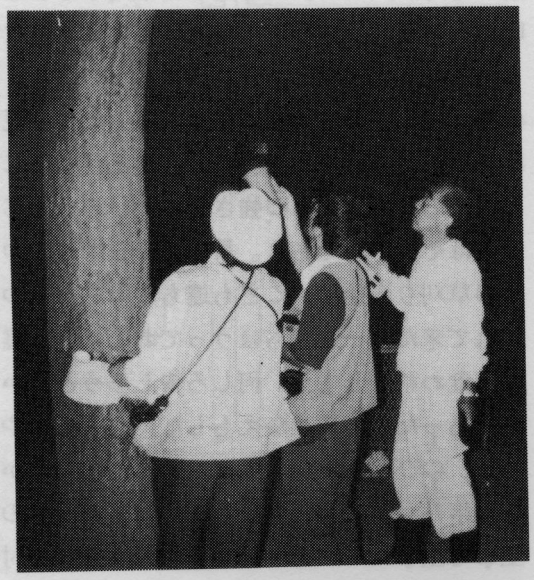
10年たてば名所になるだろうと思っていた夢が，10年たった今無残にくずれてしまった。

春にはあやめ園の草取りに来たこども達が，喜々としてつくしつみに，もち草つみに遊んだ土手はコンクリートで固められ，土手道も舗装されて車の通りがはげしくなった環境ではあやめ園作りは似合わない，もう自然と親しむ場所では無くなった。これが土浦でのあやめ園作りの10年である。やわらかい雑草の河川敷であやめ園のまわりでこども達と楽しもうと思ったことも泡雪のように消え去った。

（会員）

夜のカミキリムシ作戦

＜深夜の亀城公園で＞



亀城公園の松のうち，名松はほとんど枯れてしまいました。いろいろな予防手段はとったとのことですが，それが適切でなかったのでしょう。せめて，あと残った松は残したいというのが私たち市民の，切なる祈りなのですが，この残りの松も，かなり危くなって来ました。夜な夜な，夜の蝶ならぬカミキリムシが大量発生し，それが少し弱って来た松に集中攻撃をかけているからです。真夜中の観察を根気強く続けて来られた茨大の鈴木先生に誘われて，たった一晩ですが行って95匹のサビカミキリをつかまえました。市も最後の手段として鈴木先生及び私たちのアドバイスを受け入れて，カミキリムシ捕獲部隊をつくり，夜中に亀城公園に出張し，ひっとらえてくる作戦を展開中です。これで枯れそうな松が助かればいいのですが……。